

論文内容の要旨

氏名	石 俊
論文題目	コーパスに基づく日・中味覚形容詞の対照研究 ——認知言語学からのアプローチ

要 旨

人間にとって味覚は基本的な感覚であるにとどまらず、人間が味覚経験を通して味覚以外の概念を認知することは普遍的に存在する現象といわれる。日・中両言語の味覚形容詞は、類似点が多いと同時に、「味覚」以外に様々な意味があり、それぞれの特徴を持っている。本研究は、コーパスに基づいて用例を収集・分析し、「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味・用法を再整理・分類し、計量言語学的手法によって、コーパスデータに対して定量的な調査を行った。そして、認知言語学的視点から、味覚形容詞の意味拡張のプロセスを解明し、プロトタイプの意味から拡張していく各派生義を見出し、多義的意味ネットワークを提示した。さらに、対照言語学の角度から、「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味・用法、語義分布、意味拡張などにおける異同を明らかにした。本稿は次の七章から構成される。

第1章「序章」では、本研究の目的・意義、研究対象、研究方法を定めた。

本研究の目的は、日・中味覚形容詞「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”を取り上げ、その意味・用法、語義分布、意味構造と拡張プロセスなどにおける異同を究明することである。本研究の記述・分析・解明することによって、両国の学習者の多義語習得の手助けとなり、日・中異文化の理解や日本語教育、中国語教育への応用にも役立つものではないかと考えられる。

本研究は、コーパス言語学、計量言語学、認知意味論など様々な方法を取り入れ、まず、『中日対訳コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『北京大学汉语语言学研究中心语料库』など、3つの大規模なコーパスを活用することにより、味覚形容詞の各意味・用法を抽出し、各語義を認定する。次に、プロトタイプ理論のカテゴリー観に基づき、「甘い」・“甜”、「辛い」・“辣”、「苦い」・“苦”、「酸っぱい」・“酸”の意味・用法を「身体体験」、「人間活動」と「物事の状態」という3つのドメインから捉え、各語義の関連を解明する。最後に、各拡張ドメイン内における個々の意味・用法の検討を踏まえ、「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の比較・対照を通して、両者の対訳関係を明らかにし、意味・用法、語義分布、意味拡張などにおける相違点・類似点について詳しく考察する。

第2章「先行研究」では、味覚形容詞についての先行研究を「日本語における先行研究」、「中国語における先行研究」、「日・中対照研究」、「日・英対照研究」など4つの面から整理した。武藤(2001)、小出(2003)、葛・黄(2012)、崔・馬場(2010)、皆島(2005)、瀬戸(2007)など代表的な研究をまとめ、味覚形容詞の意味分析・記述をめぐる従来の研究で取り残された問題点を指摘した。

具体的な分析として、第3章から、第6章までの各章では、コーパスから「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の使用例を収集・分析し、その意味・用法を対照しながら、考察を行った。認知言語学の視点から、日本語の「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と中国語の“甜、辣、苦、酸”は原義とプロトタイプの意味では一致している。各味覚形容詞の原義はそれぞれの味(甘味・辛味・苦味・酸味)を持つ

ものを舐めたときの味覚であり、認知主体の身体体験である。糖分や薬・毒などがあるような味であろうと、唐辛子や酢のような刺激的な味であろうと、この4組の味覚形容詞のプロトタイプの意味は、共に認知主体の身体体験が対象の性質として読み替えられたものだと考えられる。これらの味覚形容詞の原義とプロトタイプの意味は<結果——原因>に基づくメトニミーによって関係づけられている。

第3章では、「甘い」と“甜”の考察について主に次のような結果を得た。

味覚ドメイン内において、日本語の「甘い」は、味噌、醤油、お酒、カレーなどを修飾し、「塩分や塩気が比較的少なく、アルコール度などが強くなく、口中における刺激が弱い」という意味をもって、「辛くない」とも言える。「甘い」のプロトタイプの意味の「刺激性が強くない」との類似性による意味転用であると考えられる。共感覚ドメインへの転用について、「甘い香り」や“甜香”などのように、「甘い」と“甜”の嗅覚への転用がプラスの評価を帯びている。「甘い」と“甜”は両方とも視覚への派生は可能であるが、“甜甜的笑脸(甘い笑顔)”は子供や女性にだけ使われるのに対し、「甘いマスク」は男性に用いられている。聴覚ドメインへの転用について、「甘い声」は、子供や女性に限らず、男性の声についても言えるため、使用上に性別の差が見られないという点で“甜”とは異なる。触覚ドメインへの転用について、「甘い」と“甜”は、「甘いキス」や“甜甜的吻”のような「男女の愛に満ちあふれて快い触覚」を表す場合、類似しているが、「甘い」は「甘い手触り」のように、より一般的に、「物理的な触覚が快い、さわり心地がよい」といった状態を表すこともできるようであるが、“甜”にはこのような転用は見当たらない。また、日本語の「甘い」は「(プレーキのレバー)握りが甘い」、「甘い痛み」など「感知的に堅牢でない」、「肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない」についても言えるが、“甜”には似たような意味・用法はない。人間活動ドメインにおける意味・用法に関して、“甜”は“吃饭甜(美味しい食事)”、“甜甜的觉(安らかな眠り)”、“甜活(楽で報酬のいい仕事)”を表わし、「食事」、「睡眠」、「仕事」について用いられる。これらの意味・用法は「甘い」には直接対応しないものである。一方、「甘い」は「甘い対応」、「甘い考え」、「子供に甘い」などのように、人間の精神と行為などが慎重さや厳しさに欠けているなどマイナス的な意味を表わす用法がある。この意味・用法は“甜”と直接対応しないものである。「甘い」は物事の状態ドメインに拡張できる。例えば、「ピントが甘い写真」は“对焦没对准, 焦距没调整好”と、「相場が甘い」は“股市行情低迷”と理解されるべきであるが、“甜”にはこのような意味派生は見当たらない。

第4章では、「辛い」と“辣”の考察について主に次のような結果を得た。

味覚ドメイン内において、「辛い」に関する味覚ドメイン内の転義は“辣”より豊かで、刺激的味や酒気を表すほかに、現代日本語においては、すでに少数であるが、鹹味、酸味を表すこともできるようである。もし「味噌汁は少し少ない」や「酸っぱさが鋭く少ない」などのような日本語表現に遭遇した場合、単純に“辣(辛い)”という味と理解したら、誤解が生じてくることになる。一方、“辣”は、“麻辣鲜香”や“吃香喝辣”などに使われ、香辛料がもたらす“辣”という「美味な味覚」、「贅沢な食生活」という意味である。共感覚ドメインへの転用について、「辛い匂い」や“辣味(嗅覚)”などのように、「辛い」と“辣”ではいずれも嗅覚を表わす共感覚的用法が見られる。そして、“辣”はまた聴覚、視覚、触覚を表すことができる。それは「辛い」が持たない意味・用法である。視覚ドメインへの転用について、“辣”は“火辣辣的眼神”、“辣妹”、“身材火辣”などのように、感情の動きが激しい熱い視線や女性の性的魅力についても言える。触覚ドメインへの転用について、“辣”は、“骄阳火辣辣的”“火辣辣的疼”のように、熱さや痛みなど体のある部分を持つ激しく強く、ひりひりとする触覚的刺激といった状態を表すこともできる。聴覚ドメインへの転用について、“辣”は“泼辣的叫声(激しい叫び声)”など「激しい、きつい声」についても言える。人間

活動ドメインにおいて、“辣”にはまた“脸上火辣辣的(激しい感情の動き、羞恥感)”、“火辣的情话(熱烈な愛情)”、“泼辣的女人(女性の横暴な性格)”、“作风泼辣(てきぱきしている仕事ぶり)”、“心狠手辣、呛辣的发言(残酷で悪辣な手口、言葉)”など多彩な派生表現が見られている。一方、「辛い」は「辛い採点(打点厳格)」、「辛い目(倒霉、糟糕の境遇)」のように、評価の厳しきや苦しい、つらい、切ない経験について用いられる。これらの意味・用法について、“辣”と「辛い」は直接対応しないものである。“笔墨泼辣(書道、絵画などが気迫がある、氣勢が感じられるさま)”などのように、“辣”は物事の状態ドメインに拡張でき、「辛い」にはこのような意味派生は見当たらない。

第5章では、「苦い」と“苦”の考察について主に次のような結果を得た。

味覚ドメイン内の転義が見当たらないが、共感覚ドメインへの転用について、「苦い臭い」や“苦味(嗅覚)”などのように、「苦い」と“苦”ではいずれも嗅覚を表わす共感覚的用法が見られる。聴覚ドメインへの転用について、“苦”は、ただ“苦笑”という“笑い声”を修飾する特別な場面に限られているが、「苦い」は「苦い声、苦い曲、苦い響き、苦いメロディ」など様々な場合に普遍的に用いられる。一方、触覚ドメインへの転用について、“苦”はまた、“苦寒”のように身体的に寒いと感じる場合に用いられる。しかし、日本語にはそのような使い方がまったく存在しないのである。人間活動ドメインにおける意味・用法に関して、“苦”は「大変な、苦勞する」という意味で、“苦差事”、“苦活”など様々な場合に普遍的に用いられるのに対し、「苦い」にはこのような意味派生は見当たらない。また、“苦学”、“埋头苦干”などの“苦”は、「一生懸命である、まじめな」という意味で一般的に用いられている。なお、“苦言相劝”“苦口婆心”という表現があり、「辛抱強く、飽きもせず、何でも言う」という意味を表している。これらの意味・用法は「苦い」には見られないが、“苦口”はある程度「口を酸っぱくする」と通じている。“苦”は“苦日子(時代や境遇などの辛さ)”、“生活(貧・困)苦(まずしい、貧乏な)”などのように、物事の状態ドメインに拡張できる。日本語の「苦い」にはこのような意味派生は見当たらない。

第6章では、「酸っぱい」と“酸”の考察について主に次のような結果を得た。

味覚ドメイン内において、腐敗の味・発酵の味を表わす「酸っぱい牛乳(腐った牛乳)」や“酸奶(ヨーグル)”などのように、「酸っぱい」も“酸”も味覚ドメイン内において意味拡張が生じている。共感覚ドメインへの転用について、「酸っぱい匂い」や“酸味(嗅覚)”などのように、「酸っぱい」と“酸”ではいずれも嗅覚を表わす共感覚的用法が見られる。視覚ドメインへの転用について、「酸っぱい」は「酸っぱい顔」、「酸っぱい表情」など「酸味を口にすると、口をすぼめた独特な表情」についても言えるが、“酸”には似たような意味・用法はない。聴覚ドメインへの転用について、“酸”では“酸嘶・酸鸣”という用法があるが、ここの「酸っぱい声」は「悲しい声」、「悲痛な叫び」、「悲鳴」と解釈される。さらに、“酸”は“腰酸・腿酸”など触覚(体の感覚)を表すことができるが、それは日本語の「酸っぱい」にまったく見られない用法である。人間活動ドメインにおける意味・用法に関して、「酸っぱい」と“酸”は両方とも「つらい、苦しい」という気持ちを表すことができるが、日本語の用例は極めて少ないが、“酸”は“心酸”、“酸楚”などのように頻繁に使用されている。また、“酸”は「つらい、悲しい気持ち」を表す以外に、“酸溜溜”のような「やきもち」を表すこともできる。これも中国語の独特の使い方と言えよう。なお、「同じことばを何度も繰り返す、嫌と思われるほど」という意味で使う「酸っぱい」は中国語に訳す時に、そのまま“酸”と訳してもよいが、意味の拡張ルートが少々異なっている。「口が酸っぱくなる程言っていた」の「酸っぱい」は「何度も繰り返す、くどい」という意味になるが、“酸”は「疲れるほど」という身体感覚から派生してきたと思われる。「酸っぱい」と“酸”は各自物事の状態ドメインに拡張できるが、「酸っぱい役者」の「酸

っぱい」は「物事の盛んな時期を過ぎ、ダメになる」というマイナス的な意味を表わす用法がある。一方、中国語にはこのような意味・用法は見当たらないが、「貧乏な、みすばらしいさま」を表わす“穷酸・寒酸”は“酸”特有の使い方である。

第7章「終章」では、本研究のまとめと今後の課題を提示した。「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味・用法について、各意味ドメインにおける各語義の出現頻度を集計し、語義によって使用頻度が異なることを明らかにした。「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”は同じ傾向を示しており、いずれも身体体験ドメインの意味・用法が圧倒的に多い。プロトタイプの意味と派生義の使用頻度の比重から見れば、「甘い、辛い、苦い」と“甜、辣、苦”はプロトタイプの意味より、派生義の方が多用される傾向を示している。一方、「酸っぱい」と“酸”はプロトタイプの意味と派生義の使用頻度の比重がほぼ等しいという傾向を示している。ただし、個々の派生義の出現頻度に比べて、「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”はいずれもすべての語義のうち、プロトタイプの意味が最も多く使用されている。

味覚ドメイン内において、強弱という程度性に関する「甘い」と「辛い」の転義は“甜”、“辣”より豊富であり、人間活動ドメインにおける意味・用法に関して、中国語の味覚形容詞“辣”、“苦”、“酸”が「辛い」、「苦い」、「酸っぱい」より多彩な派生表現が見られる。共感覚ドメインへの転用について、従来の「一方向性仮説」によれば、味覚を表すことばは味覚より高次的な嗅覚、聴覚、視覚への転用が可能であるが、触覚への転用はできないということである。しかし、本研究のコーパスデータの収集・分析によれば、高次的な感覚への転用について、中国語において、“酸”は嗅覚と聴覚だけに意味拡張をなしているが、日本語において、「酸っぱい」は嗅覚と視覚に、「辛い」は嗅覚にしか意味拡張をなしていないことが分かる。一方、「甘い」と“甜”、“辣”、“苦”、“酸”は味覚より低次的な触覚への転用も可能であることが見られた。つまり、“甜”、“辣”、“苦”、“酸”という4つの味覚形容詞が全部触覚ドメインに拡張することができるが、従来の共感覚表現における「一方向性仮説」と違う傾向が見られた。

また、各拡張ドメイン内における個々の意味・用法の検討を踏まえ、個々の味覚形容詞の意味・用法の項目数が異なるということが観察された。日本語のほうは、「甘い」22個、「辛い」5個、「苦い」6個、「酸っぱい」7個で、中国語のほうは、“甜”14個、“辣”15個、“苦”15個、“酸”12個である。各意味ドメインにおいて、拡張の度合いは個々の味覚形容詞の意味・用法項目数によって異なることが見られた。日本語の四つの味覚形容詞の意味拡張度合いは「甘い>酸っぱい>苦い>辛い」の順で広い。そのなかで、「甘い」は顕著に広く拡張している。中国語の四つの味覚形容詞の意味拡張度合いは“苦=辣>甜>酸”の順で広い。そのなかで、“苦”と“辣”は広く拡張している。

今後の研究課題として、まず本研究においてまだ残されている「塩辛い」・“咸”に関しても認知的なアプローチによって分析すると共に、味覚形容詞のより全面的記述と分析を目指していきたい。また、中国語の味覚形容詞に単純語と複合語があり、今後はきちんと区別し、分析する必要があると考える。さらに、中国語において、“甜”と“辣”の文語表現に“甘”、“辛”があり、本稿では少し提示しただけで、詳しく分析を行わなかった。これも今後の研究課題にしたいと思う。最後に、本研究は、味覚形容詞を意味派生に焦点を当て、主に言語学的な側面から分析したが、今後は、言語現象の背景である日・中両国の文化的な面から考察する必要があると考えている。

論文審査の結果の要旨

氏名	石 俊
論文題目	コーパスに基づく日・中味覚形容詞の対照研究 ——認知言語学からのアプローチ

要 旨

本論文は、コーパス言語学、認知意味論、対照言語学などの理論に依拠し、日中両言語の味覚形容詞「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味拡張に焦点を当て、用例に基づいてそれぞれ意味・用法を分析・記述し、異同を究明した。

本論文において評価すべき点をいくつか上げておく。

第一に、意味分析のデータとして『中日対訳コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『北京大学汉语语言学研究中心语料库』など、3つの大規模なコーパスを活用し考察した。コーパスから「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の豊富な用例を検出することによって、手作業による用例の収集や分析などで感じさせられた限界を克服し、計量的なアプローチによって、より精密で客観的・実証的な分析・記述をすることができた。

味覚形容詞が本来の意味以外に様々な領域へと意味が展開し、拡張する現象は、言語主体の認知活動を映し出している。本論文は味覚形容詞「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味拡張のプロセスを分析し、身体感覚にかかわる経験が日常言語の主観的な世界をつくり上げていく背景的な基盤としての役割を明らかにした。

第二に、本論文ではプロトタイプ理論のカテゴリー観に基づき、「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”が持つ多義の意味は中心的でプロトタイプの意味を出発点として、メタファー・メトニミー・シネクドキーによって副次的で周辺的な意味へと放射状に展開し、体系的な意味ネットワークを構築したと指摘した。そして、味覚形容詞の価値評価性と程度性を視野に入れることにより、意味拡張に見られる傾向性を見いだした。また、「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の比較・対照を通して、両者の対訳関係を明らかにし、意味・用法、語義分布、意味拡張などにおける相違点・類似点について詳しく考察した。

第三に、観察の緻密さ・適格さも本論文の優れた所である。

本論文は計量言語学の方法を使って、味覚形容詞の各語義の使用頻度などについて定量的・定性的な分析を行った。

「甘い、辛い、苦い、酸っぱい」と“甜、辣、苦、酸”の意味・用法について、各意味ドメインにおける各語義の出現頻度を集計し、語義によって使用頻度が異なることを明らかにした。

味覚ドメイン内において、強弱という程度性に関する「甘い」と「辛い」の転義は“甜”、“辣”より豊富であり、人間活動ドメインにおける意味・用法に関して、“辣”、“苦”、“酸”が「辛い」、「苦い」、「酸っぱい」より多彩な派生表現が見られることを指摘した。

共感覚ドメインへの転用について、中国語において、“酸”は嗅覚と聴覚だけに意味拡張をなしているが、日本語において、「酸っぱい」は嗅覚と視覚に、「辛い」

は嗅覚にしか意味拡張をなしていない。一方、「甘い」と“甜”、“辣”、“苦”、“酸”は味覚より低次的な触覚への転用も可能であることが見られ、従来の共感覚表現における「一方向性仮説」と違う傾向が見られることを発見した。

また、各拡張ドメイン内における個々の意味・用法の検討を踏まえ、意味拡張の度合いは個々の味覚形容詞の意味・用法項目数によって異なることが示された。日本語の四つの味覚形容詞の意味拡張度合いは「甘い、酸っぱい、苦い、辛い」の順に広い。そのなか、「甘い」は顕著に広く拡張している。中国語の四つの味覚形容詞の意味拡張度合いは“苦、辣、甜、酸”の順に広い。そのなか、“苦”と“辣”は広く拡張していることを指摘した。

本論文にはこのような評価すべき点があるが、問題点がないわけではない。コーパスによる調査も含めて、基本的に文字化された資料を調査しているが、日本語の場合は単純語の形で研究しているが、中国語の場合は単純語と複合語を区別せずに、分析を行った。また、味覚形容詞を意味派生に焦点を当て、主に言語学的な側面から分析したが、言語現象の背景である文化的な面から考察したら、もっと興味深いものが得られたかもしれない。

上記のような問題点が存するにしても、本論文は、博士の学位を授与するに十分な内容を有したものである。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	靳 衛衛
副査	教授	仁田 義雄
副査	教授	山梨 正明

最終審査の結果の要旨

氏名	石 俊
試験科目	
判定	合格 ・ 不合格
要 旨	
<p>学位申請者の研究成果を確認し審査するために、博士論文を中心に口述試験を実施した（2018年7月3日）。</p> <p>申請者の本博士論文の内容に対する説明は、要領を得たものであり、本論文を当該研究分野の中に位置づけ、得られたその成果と残されている問題点についても適格に把握しているものであった。申請者は本博士論文に対して適格で客観的な自己評価を有していると判断された。審査委員の質問、指摘にも明確且つ的確に答えることができ、その応答は十分満足のいくものであった。また、審査委員とのやり取りから、申請者が日本語学、認知言語学、日・中対照言語学に関する知識、学力を十分有していることが確認できた。</p> <p>申請者の外国語の試験については、日本語によって執筆された学位論文と中国語・英語・日本語による要約における表現力の高さ・正確さから判断し、試験を免除した。</p> <p>以上の諸点を総合し、慎重に判断した結果、論文審査委員会は全員一致で、本博士論文に対する博士（言語文化）の学位授与を適格と認め、合格と判断した。</p>	

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	靳 衛衛
副査	教授	仁田 義雄
副査	教授	山梨 正明